

41. 脳卒中はどんな検査で分かるのでしょうか？

脳の血管の状態を詳しく調べる検査法として、CT（コンピューター断層撮影）とMRI（磁気共鳴画像）が使われています。造影剤とCTとを組み合わせたCTアンギオグラフィや、造影剤とMRIと組み合わせたMRアンギオグラフィは詳しく脳の血管の病気を見つめることが出来ます。アレルギーなどで造影剤が使えない人もいますので注意が必要です。MRIは脳の病変を見つけ出す感度は高い利点がありますが、閉所恐怖症の人には適していません。またMRIの検査中は、体の状態がどのように変化しているか分かりにくい難点があります。検査時間もCTよりMRIの方が長くかかります。

肘や大腿部の動脈を穿刺してカテーテルを挿入し、そこから造影剤を流して脳血管撮影をする検査法もあります。画像診断法が進歩したので、脳卒中の検査法としては、行われなくなって来ました。

脳の画像検査法としてPET（陽電子放出断層撮影）やSPECT（単光子放出断層撮影）なども使われるようになりました。MRIが脳の形態を描き出すのに対して、PETやSPECTは脳の機能を画像化して描き出す点が特徴的です。脳の細胞は、血液中の酸素を取り入れて、ブドウ糖を燃焼させてエネルギーを作り出しています。この働きが低下すると、やがて神経細胞は死んでしまいます。この働きを検査することができます。

脳を包んでいる膜の間に脳脊髄液が存在しています。くも膜下出血や髄膜炎などでは、腰のところから針を穿刺して、この髄液を取り出して検査することで、正確な診断が出来ます。後頭下から穿刺することもあります。

脳の機能の様子や、病変部がどこにあるか調べるために脳波検査が広く用いられています。特にてんかんの診断や、脳死の判定に必要な検査法となっています。頭にいくつかの電極をつけて、脳の神経を流れている電気を取り出して調べる方法です。